

第 17 回日本在宅医学会大会 シンポジスト 抄録集・ホームページ掲載用原稿

シンポジウムテーマ		公募シンポジウム「在宅における急な状態変化　どこまで在宅で対応する？」						
開催日	2015 年 4 月 25 日(土)		時間	13:40-15:10		収容人数	300 名	
講師情報	ふりがな	姓	なかた		名	きみひこ		
	ご芳名		仲田			公彦		
	ご所属		松並診療所　整形外科					
	部署					役職		

演題名(80 字以内)

運動器疾患の在宅医療 一骨・関節疾患のどこまで在宅で診るのか

ご略歴(300 字以内)

1965 年、愛媛県にて出生
 1992 年、鹿児島大学卒業
 同年、医師免許取得し京都大学付属病院勤務
 2002 年、愛媛大学大学院 医学系研究科 博士課程修了（博士号受領）
 2003 年、在宅医療開始
 日本整形外科学会整形外科専門医、日本リウマチ学会リウマチ専門医、日本リハビリテーション医学会認定臨床医

講演概要(1000 字以内)

緒言

整形外科の研修を受け、在宅医療の分野で活躍する医師は少なくない。理由として、高齢者の対応に慣れて居る事、頭・胸・腹部を除く広い守備範囲を持つ事などがあろうが、整形外科医が患者の悩みを解消する対症療法に長けて居る事も大きな理由と考える。かく言う演者も「どのような医療を患者と家族が望んで」居るかを考えつつ、試行錯誤を繰り返しながら月に二回、外科開業医と協同して在宅診療に携わって居る。

目的

変形性関節症や骨粗鬆症、骨折など、実際の運動器疾患（ロコモ：ロコモティブ・シンドローム）の症例に即して、どこまで、在宅医療で対応出来るのか、或はどこまで、在宅で対応すべきかを考えたい。

方法

これまで経験した骨・関節の運動器疾患の症例を挙げながら、演者の行って居る在宅診療を紹介する。

結果

整形外科の外来診療で多く使われる、ヒアルロン酸の関節注射やトリガ・ポイント注射は在宅診療でも有益である。下肢の骨折は手術適応になる事が多く、痛みを除くという点でも、早期に入院して手術を受ける事を勧めて居る。上肢の骨折はギプス等で保存的に対処出来る事が多く、在宅で対応し得る。骨粗鬆症に対する上皮小体ホルモン活性部位、テリパラチドも在宅で使用して居るが、週一回製剤は高カルシウム血症に注意が必要である。関節リウマチに対する生物学的製剤は、エタネルセプト皮下注射を在宅で行って居る。腰・下肢痛に対する仙骨部硬膜外ブロック注射も、工夫すれば在宅で施行可能と考える。血流障害に基づく下肢の潰瘍も、感染がなければ在宅で診療可能ではなかろうか。何でも在宅で診るという訳には行かないけれど、整形外科的な手技を活かせば、かなりの運動器疾患に対応出来ると思う。

考察

ロコモとは「運動器の機能不全」のみならず、「要介護リスク」が高まった状態であり、これら加齢に起因する運動器疾患を根本から治癒せしめる事は難しい。しかしながら、整形外科診療で多用される対症療法の手技を組み合わせる事で、在宅患者に対するケアの質を高める事が出来ると考える。患者を悩ませて居る問題を見出し、それを解消するリハビリテーション的対応こそが、これからの在宅医療に不可欠ではなかろうか。